

れいわ ねんど だい かい しずおかしたぶんかきょうせいきょうぎかい ぎじろく  
令和4年度 第2回 静岡市多文化共生協議会 議事録

- 1 日 時 2022年10月25日（火）19：00～21：00
- 2 場 所 静岡市役所 静岡庁舎3階 茶木魚
- 3 出席者 多文化共生協議会委員10名  
高畑 幸、長阪 有美奈、伊藤 洋子、磐村 文乃、加藤 伶奈、  
ゴー ゲエン ゴック トラム、中島 一彦、野田 敏郎、  
パメラ ジュール、ホリウチ アリッセ イズミ  
望月観光交流文化局長、岡村観光交流文化局次長、事務局  
欠席者：小川 毅、中村 直保、松永 秀昭
- 4 傍聴者 2名
- 5 次第
  - 1 開会
  - 2 議事「静岡市多文化共生推進計画」骨子案の審議
    - (1) 施策の柱と方針、成果指標
    - (2) 計画の基本的な考え方
  - 3 その他
  - 4 閉会

事務局（萩原）：お待たせいたしました。ただ今から、令和4年度 第2回静岡市多文化共生協議会を開会いたします。今回台風15号により、急遽日程を変更させていただきご迷惑をおかけしました。台風15号の被害が大きく、私たちも国際交流協会とともに外国人住民の方への多言語での情報発信をまいりました。毎年、訓練を行っていましたが、本番を迎えるのは初めてでしたので、色々考えることもございました。皆さんの中にも被害に遭われた方、お手伝いをされた方がいらっしゃると思います。是非感じたことを教えていただきたいと思います。本日は小川様、中村様、松永様は所用により欠席というご連絡をいただいております。また会議は記録のため録音させていただきます。それでは、開会にあたり、観光交流文化局長望月よりご挨拶を申し上げます。

望月観光交流文化局長：台風15号の復旧の途中での開催ですが、本日も多くの委員のご出席をいただきありがとうございます。市では多文化共生推進計画の上位計画となる第四次総合計画の基本計画を次の11月議会上程する予定で、そちらも大詰め作業をしております。多文化共生推進計画についても、多文化共生のまち推進条例に基づき、どのように多文化共生を具体的に進めていくか本日のご審議を基礎とさせていただきます。限られた時間ではありますが、皆様には活発なご意見をいただけますようお願いいたします。

事務局（萩原）：本日は国際交流文化局長岡村次長も参加しております。それでは、早速議事に移ります。これより高畑会長に議事の進行をお願いいたします。

高畑会長：活発なご意見の交換をよろしくお願いいたします。本日は、多文化共生推進計画の骨子案について審議をさせていただきます。まずは、事務局から本日の内容について説明をお願いします。

事務局（興津）：（配布資料6から9ページを説明）

高畑会長：それでは施策の柱と方針、また成果指標について、これからグループワークをしていただきます。Aグループは私、Bグループは長阪副会長に進行役をお願いします。グループの協議は19:50までです。グループでの協議の後、各グループで3分程度、どのような事を話し合ったかという発表していただきます。

Aグループ 施策1「安心できる生活環境づくり」、施策2「教育の機会や場づくり」

パメラ委員：アンケート調査の回答が50%は少ないか、指標としてあいまいでよく分からないです。

野田委員：静岡市はとても暮らしやすい、と思う外国籍市民の割合を指標としていいのでしょうか。

高畑会長：1の安心できる生活環境づくりは、やさしい日本語や多言語、言葉の問題にフォーカスが当てられていて、総合相談センターの機能の強化が書かれています。内容は抽象的な気もします。

磐村委員：総合相談センターは一元化するということですか。

高畑会長：今SAMEの中にある多文化共生総合相談センターを拡充するということですね。

パメラ委員：やさしい日本語や多言語で必要な人に届くように、「分かりやすい」というより「とどきやすい、手に入りやすい」という言い方も入れるべきです。言語の問題だけでなく、情報が届かないことが問題です。

野田委員：行政の難しさ、手続きの煩雑さもあります。

パメラ委員：日本人さえ分からない。情報がどこにあるか見つからない。やさしい日本語でも見つからなければ意味がないですね。

磐村委員：静岡市多文化共生総合相談センターは、全ての機能がそこにあるということですか。

パメラ委員：一か所だけでも困ります。いろんな人がいろんな視点で来ますから。

ホリウチ委員：やさしい日本語の情報をどこで手に入れられるのか、聞いたことがないと言われたことがあります。市役所か、SAMEか、どこで手に入れられるようにするか。

野田委員：ほしい情報がどこにあるかは外国籍の人だけでなく、日本語母語話者もウェブサイトを見て、ゴミの捨て方一つにしても探しにくいようなことがあります。

高畑会長：探すこと自体がストレスになると探すのをやめてしまいますね。必要な時に必要な人に届くような分かりやすい、届きやすい、見つけやすいものにすべきです。

野田委員：民間企業のウェブサイトは分かりやすく、商品を買ってほしいので誰でも買いやすいようになっています。

高畑会長：情報を置く場所は、発信する人の都合でなく、受け取る人が受け取りやすい場所に置くのが本来的な在り方です。多文化共生総合相談センターもどこにあるのかということですね。

磐村委員：そこに行けば、いろんな所に繋がれたとしても、まずそこがどこにあるのかということですね。

高畑会長：今は市役所の中にはありますが、人々が歩くような場所にあったほうがいいですね。情報を発信する場所を見える場所に置く。また、ウェブサイトも見つけやすい所であってほしいと思います。

パメラ委員：実際に足を運ぶ前にネット上で見られるということも重視しないとイケない。

野田委員：市役所はめったに来ない所です。スーパーに行くようには市役所には行きません。

パメラ委員：特に外国人にはそれがいえます。

野田委員：最初の住民登録以来行きません。行く用事がありません。

高畑会長：市役所の外で生活する人が見える場所に置いてもらうことが基本です。また、伝え方の一つとしてのやさしい日本語や多言語であって、言葉は道具にすぎません。その2点で成り立つと思いますね。しいていえば大きい問題として、安心できる生活環境づくりは言葉の問題だけでもないかもしれません。

磐村委員：指標についてですが、アンケートの対象者をモニターのように一部前回と同じにできれば、縦断的に8年後と比べられるのではないかと思います。

高畑会長：2020年のランダムサンプリングと2029年のランダムサンプリングとでは回答する人は違うので、数量調査もやりつつ、2020年に回答した人の中から、9年後同じ人にも回答してもらうことですね。

磐村委員：もう少し具体的なところをヒアリングしてはどうかとも感じます。

パメラ委員：変化を感じているかななどの他の質問を入れる方法もあると思います。

野田委員：どのように変化したと思いますかという質問ですね。

磐村委員：どんな点が改善されて暮らしやすくなったか、どんなサービスや制度、環境的な整備が進んだらいいと思うか、といったヒアリングを行えば、具体的なところが引き出せるのではないのでしょうか。8年はタームが長いので、数年ごとであればと思います。

高畑会長：経済の悪化や高齢化の進展など社会環境もいろいろ変わると思いますね。

高畑会長：そろそろ施策2に移ります。教育の機会や場づくりについて、多文化共生の意識が根付くような生涯学習や学校教育での取り組み、学校教育での日本語の習得が必要な小中学校の児童生徒や、生活者のための日本語教室などについていかがでしょうか。

磐村委員：日本語教育が必要な小中学生について、取り出し授業なのかとか、拠点校かセンター校方式かなど、どうでしょうか。

高畑会長：静岡市はセンター校方式と、支援員が小学校等に出向くことの併用です。

磐村委員：恐らく日本語というより、教科支援のほうが主ではないかと思いますが、関わる方々が日本語習得や異文化理解にフォーカスできれば多文化共生の新しい試みとなるのではないのでしょうか。

高畑会長：学校教育での取り組みはむしろやりやすいと思いますが、生涯学習は義務でもないため、どれくらい広げられるかアイデアも必要です。

磐村委員：むしろ学校教育のほうが難しいと思います。生涯学習はムーブメントとして広がればやりやすいのではないのでしょうか。意識醸成や啓発の講座など組み立てを考えなくてはなりません。

野田委員：最近、「生活者」と「留学」と「就労」とを分けていますが、「生活者」はボランティア講座などいろいろあります。一番の悩みどころは就学支援で、国もどう取り扱えばよいか分からない状態だと思います。実際難しい問題です。日本語指導と教科指導を同時にできません。子どもたちをどうサポートするか、専門家も多くありません。就学支援は難しいですがフォーカスを当てることは重要だと思います。児童生徒、生活者のための日本語教室はすでにあります。

パメラ委員：この方針に基づくのであれば、もっと専門家を増やさなければなりません。

野田委員：小学校の先生は異動、配置換えがあり、日本語教育に3年ほど携わってベテランになったところで異動してしまいます。そこに知らない先生がまた配属され、何も蓄積されていないというようなことがどの市町にもあるようです。

パメラ委員：多文化共生についての専門の先生が学校を巡回するような制度があるとよいと思います。

高畑会長：むしろ学校の先生の研修に、多文化共生に関する内容を入れてもらうほうが早いと思います。詳しい先生を待つのではなく、専門性がある先生を育成する必要がある、それが教員研修だと思います。

野田委員：それを進めるのは国のレベルかもしれません。

高畑会長：夏休み期間の研修に加えたりして取り組めるのではないのでしょうか。外国から来た子どもたちの日本語習得に期待するばかりでなく、日本育ちの先生が外国の言語を理解するようなこともいいと思います。

磐村委員：そのためにもやさしい日本語があります。学んだり教えたりすることが大切です。

高畑会長：日本の子どもたちもポルトガル語などの外国語を学べるといいと思います。

ホリウチ委員：日本語を一生懸命教える先生に、ブラジルの文化を学んでほしいし、両方の文化を知る先生がいたらいいという話を耳にしたことがあります。

高畑会長：教員研修に入れていただきたいです。少なくとも外国から来た子が、先生も自分の国のことに興味を持っていることがわかるだけでも安心感が生まれます。日本文化を身に付けたり、同化を期待されるだけでは辛いと思います。日本の先生もブラジルのことを少し知っていれば馴染みやすいと思います。

磐村委員：社会科の時間に、「今月はこの国」とかを決めて、クラスみんなで歴史や文化を手分けして調べ、興味のあるところを発表したり、文化に触れ合ったりするような学習ができるとよいと思います。

高畑会長：そういったことを繰り返していくことで、多文化共生が重要であると感じてもらえますね。

磐村委員：子どもたちにアイデンティティや文化を尊重する意識をしっかりと持ってほしいと思います。

高畑会長：生涯学習も工夫できると感じますがどうですか。

パメラ委員：SAME でグローバルリテラシーの話がありました。言葉や文化、生活習慣だけでなく、環境問題などの大きな問題を考えるようになれば、多文化共生の重要性を感じることに繋がります。生涯学習で環境をテーマにすれば扱いやすいですね。

高畑会長：国と国、国境と国境にとらわれない、地球的課題を生生涯学習の分野で学び、沢山の課題の中の一わゆる one of them としての多文化共生を学ぶということも視野に入れられるとよいと思います。

パメラ委員：違う視点、違う方法を見付けることは勉強になります。

高畑会長：いつまでも、ある人が「ブラジル代表です」みたいに文化を教えるような教育の場では、一定のレベルまでしか行かない気がします。

パメラ委員：文化と言葉にとらわれず、課題やテーマを広げていけるとよいと思います。

高畑会長：文化も変われば言葉も変わります。それだけを話題にしていたら、いつまでも同じことの繰り返しでしかないので、そこを突き破っていきたいですね。

## 【Bグループ】 施策3「地域における交流の場づくり」、施策4「多文化共生を支える担い手づくり」

中島委員：施策3について、静岡市の自治会・町内会やご近所とかの小さな単位で考えられていますが、交流の場づくりがそのサイズで足りるのかなと感じます。町内の付き合いを避ける人もいます。交流する場というと、例えばスターバックスコーヒーのような所が必要ではないでしょうか。地域から離れた場所にも交流の場があってもいいです。SAME もそういった場所になれるとよいのですが現状ではなれていません。市役所の17階が本当にいいのか、SAME がスターバックスのようになればいいと思います、いつものコミュニティで解決できなくても、別のコミュニティで解決できる問題もいっぱいあるのではないのでしょうか。

伊藤委員：フィリピンやベトナム、インドネシアのフェスティバルを開催して交流の機会を作りたいです。私はフィリピンフェスティバルに静岡市で2回参加しました。1年に何回かあるとよいと思います。とても喜ばれますし、交流も深まります。料理の屋台で日本人とフィリピンが話をするような機会が増えるといいと思います。

中島委員：ネパールのお祭りで女性が赤いサリーを着て踊っていましたが、とてもよいお祭りをやっているんだなと驚きも感じました。

伊藤委員：日本人もそういうことをすれば、付き合いももっと増えるはずですよ。

ながさかふくかいちょう じぶん ながさか じぶん  
長阪副会長：自分たちもお祭りをしたいと思いますが広報が必要ですね。

なかしまいいん  
中島委員：わいわいワールドフェアのようにひとまとめでなくて、各コミュニティのお祭りをサポートするよ  
な体制があるとよいですね。いろんなサイズのお祭りがあってもよいです。

かとういいん  
加藤委員：外国に興味を持つためにわいわいワールドフェアに行き、そこから個々のコミュニティのお祭りに  
参加する流れができればよいと思います。

なかしまいいん  
中島委員：「交流の場づくり」から少しはずれますが、自分の国の言葉や文化を子ども世代に伝えたい方が多く  
いらっしやると思います。そのようなコミュニティを支援して日本人との接点を増やしていけるとよいと思いま  
す。場所も、地域の自治会・町内会の公民館だけではなくバリエーションがあってもよいです。

いとういいん  
伊藤委員：在日2世3世は自分たちのコミュニティが既にあるので、あまり外に出ない人が多いかなと思います。  
そういう方たちに興味を持ってもらうためにどうすればよいのでしょうか。

なかしまいいん  
中島委員：文化を伝えていくためにはコミュニティは大切で、日本人のコミュニティとも関わりをもっていける  
とよいと感じます。各コミュニティが閉鎖的なのは、まちの形としては良くないです。

ゴー委員：人が集まるお祭りはいいと思います。青葉通りをもっとうまく使えたらいいですね。

なかしまいいん  
中島委員：エスニックのマルシェが出るとよいと思います。中山間地の清沢のマルシェは来ますが、エスニック  
のマルシェはないですね。

ながさかふくかいちょう にほんじん  
長阪副会長：日本人はマルシェが好きだから、〇〇マルシェや食べ物をアピールすればよいかもしれません。

なかしまいいん  
中島委員：交流の場所を新しくつくる必要はありません。例えば、図書館で母語での絵本を読む催しなど、今  
ある公共施設がもっとオープンになるとよいと思います。劇場や歴史博物館にもそういう可能性があります。  
焼津の図書館は子どもの遊ぶ場所となっています。外国人と日本人の区分はなく子育て世代が集まる場になるよ  
うな進め方のほうが素直ですね。

ゴー委員：特に外国人の子どもたちに図書館に来てもらって、いっぱい本を読んでもらいたいですね。

ながさかふくかいちょう  
長阪副会長：る・く・る（静岡科学館）や、焼津のディスカバリーパークに行きますが、外国人の子どもが集ま  
るようなイベントは聞いたことがありません。

なかしまいいん  
中島委員：る・く・るのメニューの中にダイバーシティの考えが入れれば問題ありません。先日、美術館で英語で  
絵を観るという企画がありました。来年から SAME も英語を教えるのでなく、グローバルなリテラシーをアート  
を使って習得する講座を作りたいと思っています。新しく作ることは大変なので、今ある物が変わっていった  
ほうがよいと思います。少し考え方をかえれば、図書館やる・く・るがメニューを作れば交流の場になります。  
お料理教室、サイエンスショー、劇場、ベトナムの水のショー、インドネシアの影絵・人形劇など、いろいろ  
考えられます。

ながさかふくかいちょう つぎ にな て  
長阪副会長：次は担い手づくりのテーマに移ります。こちらのほうが難しいかもしれません。

なかじまいいん ぼうさい としかなら に にな て かなら にほんじん  
中島委員：防災の時など、担い手は必ずしも日本人ではありません。「多文化共生を支える」とはどういう状態を言うのか、多文化共生の状態自体がよく分からないです。いろいろな人がいることをみんな当たり前に分かっていけばいいし、頑張ってるものでもありません。多文化共生のまちづくりに意欲的に取り組む担い手のイメージ湧かないですね。

ながさかふくかいちょう しみん きょうりよく おも  
長阪副会長：市民に協力してほしいということだと思います。

かとういん きょうみ あるひと こうざ じぶんじしん りかい ふか  
加藤委員：興味のある人は、講座で自分自身の理解を深めたりします。横の繋がり、つまり同じ興味を持って一緒に頑張ろうという仲間ができることは心強いし、私としても励みとなっています。

ながさかふくかいちょう たぶんかきょうせい いっぴんしみん なん  
長阪副会長：多文化共生は、一般市民にとって「何だろう」といったものだと思います。そもそも多文化共生がどんなものが定期的な講座を一般市民向けに開くことも大切です。その中で仲間を増やすこともできます。やさしい日本語の講師の資格を取るとか、語学能力が高い人が仲間になるとか展開もあり得ます。

なかじまいいん せいかつにほんご かん  
中島委員：生活日本語に関してはイメージが湧きます。日本に来たばかりで日本語がうまく使えなくて生活が不便な人をサポートする人です。興味を持ってもらい、仲間を増やし、一緒に日本語の学習を支援する人がもっと必要です。

ながさかふくかいちょう くに とくしよく しゅうきょう かんが かつ た もの しょうかい とりくみ すず  
長阪副会長：国の特色や宗教、考え方や食べ物などを紹介する取組はもう進められています。

なかじまいいん にな て ひろ せんてん  
中島委員：担い手が広がらないから宣伝をしないとなりません。参加者の広がりはまだできていません。フレームはあっても、参加者が増えていくような感じはまだ見えていません。

ごーいん じかん ようび つごう むづか  
ゴ一委員：時間や曜日など、いろいろ都合もあって難しいですね。

なかじまいいん にほんご た ひと ちゅうしん わか せだい ひろ  
中島委員：日本語のサポーターはまだまだ足りないです。リタイヤした人たちが中心ですが、若い世代にも広がるとよいと思います。

ごーいん わか せだい ひと むちゅう  
ゴ一委員：若い世代の人たちはみんな SNS に夢中です。

ながさかふくかいちょう かつよう  
長阪副会長：SNS を活用すればいいかもしれません。

なかじまいいん つく か おも じょうほうはっしん き か  
中島委員：SAME のウェブサイトを作り替えようと思っています。情報発信は Facebook に切り替えています、全体のコミュニケーションのデザインを変え、ネット上でいろいろな人が繋がれるようにしたいと思っています。

だかはたかいちょう じかん かく ふんていど はっぴょう ねが  
高畑会長：時間になりましたので、各グループ3分程度で発表してください。まずAグループお願いします。

## Aグループまとめ (野田委員より)

### 施策1について

- ・言葉による分かりやすさも大切だが、自分が求める情報を入手しやすくする工夫が言語以外でも求められる。
- ・静岡市多文化共生総合相談センターについて、市役所の17階ではなく、誰にでも分かりやすい場所にあると  
なおよい。

・長期の計画であるため成果指標の調査方法も、対象となる人の層や文化背景も変わる。同じグループを対象とした縦断的、追従的な調査が必要であり、どのように変化したかが指標として求められる。

### 施策2について

- ・児童向けの日本語教育、あるいは就学支援がとりわけ重要。教育の専門家がそこに先行する鍵になる。
- ・教員の背景や、多文化に関心を持っているか、生徒に多文化に関心を持たせるような学習内容になっているかが求められる。

・生活習慣・文化だけではなく、例えば環境問題など世界共通の課題について生涯学習などの場で学びつつ、  
広い視野の中で多文化共生が重要であると気づくことができればなおよい。

高畑会長：では、Bグループお願いします。

## Bグループまとめ (加藤委員より)

### 施策3について

・交流の範囲について、町内会に限らず、いろいろな場所（例えばカフェ）があるとよい。例えば、地域から離れたところでも交流できる場。行政が気軽に交流できる場所をつくれたらよい。

・新しい交流の場づくりについて、いろいろな国のフェスティバルの創出ができれば。わいわいワールドフェアを細分化したり、各国独自のフェスティバルを新しく作れないか。または、日本人は食べ物が好きなので、最近増えているマルシェを活用したり切り口にしたらどうか。外国人と日本人双方が関われる仕組みができるとよい。外国人コミュニティのお祭りの周知に協力したり、国の文化や言葉の継承へのサポートができればよい。

・公共施設、例えば、図書館や美術館や「る・く・る」に外国をテーマにしたものが少ないので、既存の場所を活用して、少し視点を変えた企画づくりが必要。

## 施策4について

・そもそも担い手は日本人だけではないという点は押さえておきたい。今回の台風でも、いろんな方に関わってもらった。その上で、「多文化共生を支える担い手」とはどういう人達なのか。

・協議会の委員は関心を持ってやっているが、一般市民にとっては「多文化共生」がどういう言葉が分からないと思う。一般向けの講座、例えばやさしい日本語の講座とか、いろんな言語の講座を経て次のステップである多文化共生のサポーター講座に来てもらう、というような流れがあるといい。また、一人が興味を持ったとしても行動することは難しいので、仲間をつくる場になるといい。

・日本語をサポートする人が必要。国の特色、文化、考え方を伝えるような講座も必要。若い世代の担い手が少ないとのことなので、webサイトやSNSを活用してネット上で繋がれるようにしていきたい。

高畑会長：グループの発表への補足や、別の視点からのご意見があればお願いします。担い手や教育は、人づくりになると思いますが、最近、日本語教師も人手不足という話がありました。どうでしょうか。

野田委員：多分どの業種もそうだと思いますが、日本語学校も人手不足です。コロナで急にいろいろなことが変わったことありますが、これからますます国が重要とする日本語教育の人材が不足することは、本当に頭が痛いことで、地方都市の大きな課題だと思っています。

高畑会長：日本語教師の養成課程の科目の一つに多文化共生がありますので、日本語教師として活動している方は、ある程度多文化の知識もあり、そういう人達をもっと増やしてほしいと感じます。日本語教師の方だけでなく、学校の先生や、民間企業で働かれる方にも、多文化共生の知識を学べる場もほしいと思います。

中島委員：Bグループで話をしていて、「3地域における交流の場づくり」より「4多文化共生の担い手づくり」のほうが難しいと思いました。多文化共生という言葉が多用していますが、それが実現した社会はどういう姿なのか、共通のイメージが多分無いと思います。しかし、計画を作っていく以上、どんな社会か少し具体的にしないと、共通の方向へ向いていけないと考えました。その上でウェルビーイング、心と体の幸せが大切で、個々でなく社会全体として、私たちのウェルビーイングをどう実現できるかに尽きると思います。

高畑会長：多文化共生を具体的なイメージについて、皆さんの中には既に多文化共生が進んだ社会に住んでいたりと、行ったことがある方もいらっしゃると思いますがいかがでしょうか。多文化は主に外国から来た人のことを指すと思いますが、そのあたりはどうでしょうか。

ホリウチ委員：他の話になってしまいますが、20年以上前から医療通訳のボランティアをしています。きっかけはSAMEで相談員として勤めていた時に、ブラジルの方が病院に行きたいけど言葉が通じないので医療通訳をしてほしいと頼まれたためです。毎年一人か二人ぐらいそのような人がいます。場合によってはタクシー代をも

らいますが、あくまでボランティアとして携わっているので、周りからは「それは行政がすべきことだからやめなよ」と毎年言われています。20年以上経ちましたが、いまだにボランティアで医療通訳を頼まれます。病気の人をどうしても助けたくになります。市でそのような取組があるとよいと毎年考えています。

高畑会長：多文化共生を仕事とすることも大事だと思います。ボランティア頼みではあまり続かないおそれもあります。そういった点を担い手づくりの視点に入れてほしいと思います。専門職として多文化共生を支える人たちが、仕事としてずっと続けられる状態も多文化共生社会を具現化した1つのイメージだと思います。

野田委員：最近大学生に日本語の授業をしていますが、どういう所で日本語教育に関わりたいかを聞くと、日本語学校の先生ではなく行政職員として関わりたいと思っている人が十数人いるうちの半分くらいです。関心を持つ若い世代は確実にいます。

高畑会長：関心を持つ人が行動に表せて、仕事にもできるようになることが大事ですね。

長阪副会長：日本はもともと島国で、それは良くも悪くもいろいろあって、模範というわけではありませんが、私が留学したイギリスのことを思い出しました。イギリスも島国ですが体制が日本とは全然違います。自分は欧米人だからかもしれませんが、イギリス国籍でも肌の色が違う方々がいます。今回首相になった方もインド系の方で、私のホストファミリーもインド系の人たちでした。イギリスは肌の色とか顔とか源はあまり気にしないで、言葉さえできれば歓迎される感じ。日本に置き換えれば、日本に住む外国出身の方々は、できる限り早く日本語を習得してほしいと思います。この国に住むならこの国の言葉で自分を主張していかないといけません。個人的な意見ですが、この国にもルール、文化や歴史があるので、少しでも早くこの国の言葉を覚えましょうというのが願いです。反対に日本の方々にも、これまでの歴史もありますが、こんな世界になってきているのだから、「イギリスになれ」とは言いませんが、もう少し緩くしたほうがいいかなと思います。無理やり、多文化共生社会を作りましょうということではなく、お互いにどんどん近づいて行く形がいいと思います。外国の方にもぜひ、アルファベットでない日本語もしっかり覚えてほしいです。私のイメージでは、日本の方々も外国人に合わせていく機会が多い気がするので、日本人が合わせるばかりでなく、お互い様というか、ここに住みたい、仕事したいなら、日本語学校などでしっかりと言葉を習得してもらい、その一方でこの国で、この島を守っている方々にも自然な形で向きあってほしいと思います。日本はルールが好きかもしれませんが、イギリスは日本に比べて素朴で窮屈でない国だと感じました。

高畑会長：言語の習得という点では実力主義です。社会参加の面でバックグラウンドがどうであれ実力主義がフェアな社会になっています。次のグループワークについて、事務局から説明をお願いします。

事務局（興津）：これまでのお話を聞いていて、施策4で「多文化共生を支える担い手づくり」としていますが、「支えてください」というお願いではおかしいので、みんなが活躍できることを考えなければならないと思いました。次は、同じ内容、同じテーマで各グループで話し合いをしていただきます。計画全体に関わる基本的な考え方、8年間でのどのようなところを目指していくかなどグループワークでご検討をお願いします。

はいふしりょう (配布資料) 4、5 ページを説明)

だかはたかいちょう けいかく きほんてき かんが なた はいふしりょう さいご  
高畑会長：計画の基本的な考え方について、配布資料の4ページと5ページについてです。最後の10ページも  
さんしやう かく ほん あ すず  
参照しながら、各グループで話し合いを進めてください。

Aグループ

だかはたかいちょう こんほんてき ぶぶん たぶん かきやうせい ひつやうせい しずおかし めざ たぶんか はな  
高畑会長：根本的な部分について、多文化共生の必要性和静岡市が目指す多文化について話していきたいと思  
います。

パメラ委員：この文章だとあまり必要性を感じられません。市民が読んで、どこが問題か、なぜ必要かを具体的に  
にしないと自分の問題として意識してもらえません。

だかはたかいちょう ぎやく たぶん かきやうせい な ばあい かんが だいい みる おも  
高畑会長：逆に多文化共生が無い場合を考えると、なぜ大事かも見えてくると思いますので、両面で考えた  
らいいと思います。日本語学校の建設時に、近所の人から反対が出るという話が以前大阪でありましたね。

の だいいん こくさい がくいん じつさい ねんちか りかい え じかん ねん やはた こ  
野田委員：国際ことば学院も、実際にできてから10年近くは理解を得るのに時間がかかりました。99年に八幡に越  
して毎週毎月のように地域からクレームがありましたが、徐々に理解していただけるようになりました。地域の  
かつどう さんか ぶんかさい き にほんごがっこう し いっしょ く  
活動に参加したり文化祭に来ていただいたりして、日本語学校を知ってもらい、一緒に暮らす人たちだとの理解  
を得ました。

だかはたかいちょう ねん ねんまえ ころ たぶん かきやうせい ことば な じだい たぶん かきやうせい  
高畑会長：99年だと23年前ですが、その頃は多文化共生という言葉が無かった時代です。多文化共生は、2006  
ねん そうむしやう ほうしん ふきやう はじ まえ にほんごがっこう ができ まわりのひとたちへのもんく はんろん  
年の総務省の方針から普及し始めたので、その前は日本語学校ができて周りの人たちへの文句に反論するロジ  
ックもありませんでした。今は、社会の望ましい在り方として、多文化共生が条例にもなっていますので、ひ  
とつの社会の望ましさとして普及していき、同じようなことがなくなると思います。

ほりうち委員：大阪の話は最近の話ですか。

だかはたかいちょう ねんまえ おも いま にほんごがっこう ほいくじよ とき まわりのひとたちへのもんく はんろん  
高畑会長：2年前だと思います。今は日本語学校だけでなく、保育所ができる時も周りから反対が出ます。保育所  
も、日本語学校も、老人会をしても苦情が出ます。

いむらい委員：人口減少の中での労働力の問題について、グローバル社会でどうしていくか、総合的にみても喫緊  
の課題だと思います。文化的な背景が異なる方々とともに仕事をしていくことは、共生へのパラダイムシフトが  
求められますが、静岡市では条例もあり社会が進むべき方向として示されているので、着実な一歩を歩み、確信  
を持って進めていければいいと思います。

パメラ委員：情報化社会で変化も早いので人が増えても柔軟な社会でなくてはなりません。柔軟であることで  
多文化共生が自然と身に付くと思います。

だかはたかいちょう へんか と いま えんやす えいきやう きゆうりやう いぜん わりき  
高畑会長：変化は止められませんし、今は、円安の影響で給料が以前により3割下がっています。せめて来た  
ひと かんげい き  
人を歓迎できていないと、来てもらえないようになります。

ホリウチ委員：日本が選ばれなくなる危険性はありません。

高畑会長：そうした状況だからこそ、少なくとも外国から来た人達が参加しやすく、ましていじめられるようなことがない状態でなければなりません。

パメラ委員：日本に生まれ育った日本人にとっても、多文化共生が生活を豊かにする上で鍵となると思います。

高畑会長：外国から来た人だけでなく日本に住んでいる人たちのためにも、多文化共生という言葉が無い時代に受けた嫌な体験を繰り返さないようにしたいですね。その上でこの条例は大事です。

野田委員：多文化共生という言葉はどのあたりから出てきたのでしょうか。

高畑会長：2006年に総務省が自治体に多文化共生推進プランを作るよう働きかけたことがきっかけと言われてます。それ以前の国際化・グローバル化は外向きの話でしたので、内なる国際化という言葉も使われましたが、2006年から多文化共生として整理され、地方自治の仕事のひとつとなりました。

パメラ委員：アメリカも、その頃にインターナショナルからマルチカルチュラル、すなわち多文化という言葉に切り替えたようです。以前はメルティングポットと言っていたのも使われなくなっています。

高畑会長：反対の概念として同化を押し付ける同化主義がありますが、いろいろな文化が併存する状態が望ましいことから多文化共生がでてきました。多文化共生社会の具体的な形は、さっきご質問が出たように、誰が見ても明らかな提示ができるといいと思います。やさしい日本語は、何を指して作られたか、何のためにあるのでしょうか。

磐村委員：やさしい日本語は阪神・淡路大震災で、外国人が情報弱者になった反省に基づいて開発されたものです。2000年代、生活者としての外国人との多文化共生が社会課題になり、情報発信など行政の取組になりました。減災のためのやさしい日本語から、多文化共生、ツーリズムなどにも広がっています。やさしい日本語は日本人が学び、使うものです。「やさしい」はひらがなですが、外国人にも伝わりやすい「易しい」表現、相手に配慮した「優しい」気持ちという二つの意味が込められています。コミュニケーションがとりやすくなれば、お互いに生きやすくなると思います。やさしい日本語は外国人だけでなく、高齢者や小さな子ども、障害をお持ちの方にも使うことができます。

高畑会長：もともと、災害時に話が通じて共に生き延びるための言語ということですね。

磐村委員：外国人とのコミュニケーションはどうしても英語でなければと思いますが、英語より、やさしい日本語のほうが通じたという調査結果もあります。多言語化もされていますが、すべての言語をカバーすることはできません。やさしい日本語が役立つと思います。やさしい気持ちでという、その姿勢、マインドが大切です。

高畑会長：日本人は減り外国人は増えています。やさしい日本語に代表される簡単な伝え方、相手を尊重する気持ち、全体的な在り方としての多文化共生の必要性にもなりますね。個人的には同化主義は無理だと考えます。学校教育は同化主義的な一面もあり変えていかなくてはならないように感じます。

野田委員：漢字の教え方ひとつとっても、いまだに日本語学校も筆順が大切だと教えていますが、考えてみると、何のための筆順が議論にもなっています。昔からの凝り固まった考えに支配されているようにも思えます。

高畑会長：実際に教えている場面ではやさしくないわけですね。今は手書きでなく、入力や予測変換もあるから、極端な意見かもしれませんが、筆順にこだわってまで書かせる必要があるのかなとついつい思ってしまいますね。

ホリウチ委員：日本語の美しさはそこからくるようにも思えます。

高畑会長：できる人はできればいいですね。普段は留学生とメールやLINEで連絡しているため、留学生が手書きで日本語を書くところはあまり見たことがありません。

パメラ委員：日本人でさえも書けないことがありますね。

野田委員：日本人とはこうあるべきみたいな、同化に繋がるような考えが残っているかもしれません。

## Bグループ

中島委員：最初の説明に総合計画が出てきました。市全体としてどういうまちをつくっていくか、「ひとりひとりが輝く」となっていたと思います。日本人もソーシャル・インクルージョンによって多様な人々を認め合う社会を作っていく中で、外国人と日本人の共生は象徴的です。日本人だけでも違いがあるのに、外国人と日本人の関係性を行政がどう整理するのか、おそらく背景はいじめの問題なども一緒に、ただ、多文化共生は日本語や、文化的背景など、もう少し要素が加わります。例えば必要な通訳の確保を政策として取り扱ったりもします。日本は人口減少、高齢化で、外国から人が来てもらわないといけないという考えで国の政策がある一方、地域社会はもっと日本人もどのようにしたら幸せになれるのか真剣に考えなければなりません。その時、やはり多文化共生が必要だといった整理をしておかないとよく分からなくなってしまいます。

ゴー委員：世の中が変わって来ています。セルフレジもレストランも自分でオーダーできるようになり、人がどんどん減ってきています。そうすると働く場所も無くなるのではないかと最近不安に思っています。日本も高齢化で社会福祉士や介護福祉士の方がとても不足しているので、そうした人たちをたくさん増やすためにも、資格取得のための助成金を行政が負担するような制度があればよいと思います。

中島委員：必要とされる職業も変わります。8年経ったら社会も相当変わっていますね。

長阪副会長：高齢者の方が多文化共生の理念についていけなくなるのが心配です。外国人は若者が多く、

高齢化が急速に進む日本の方々とうまく共生できるかが課題だと思います。

ゴ一委員：SAMEには「もし隣の家が外国人だったらどうする？」という講座があります。昨年は若い参加者が多かったのですが、今年は年配の方が多いです。私が参加したのは、韓国とインドネシアとベトナムの会でしたが、参加者からもんくを言われているような雰囲気になってしまいました。「やつらが」といった呼ばれ方もされました。朝、留学生が働くコンビニのレジで日本人が冷たく、「ありがとう」の言葉を聞いたことはありません。頑張っているのを見ていると、私はなるべく言うようにしていますが残念です。

長阪副会長：島国の文化なのかもしれません。

ゴ一委員：外国から来る人たちは若いので、高齢者の日本人と噛み合っていないようにも見えます。

中島委員：年代のギャップかもしれません。

長阪副会長：若い人はバーチャルの世界に居る人が多いですね。

中島委員：日本の高齢者も介護される側にもなり、邪魔者扱いされる立場にもなり得ます。

ゴ一委員：介護する側も外国人の方が多くて、危ない仕事や力が必要な仕事はほとんど外国人です。日本にいる外国人はお金ももらえるから、仕事があるから来ているといった偏見が多いようにも感じます。そういう目で見られると気持ち良くないし仲良くできません。日本にいますので、できれば日本語で話しかけてもらえればと思います。やさしい日本語でいいから何か話しかけてほしいと感じます。

中島委員：みなさんの話を聞くと、結構メンタルな部分が大きいですと感じました。制度がいろいろあっても、本当の意味での融和が必要で、仕事もどう変わっていくかということです。日本人どうしても高齢者と若い人の間では同じような問題があります。多文化は外国人と日本人の間の問題ではないということだと思います。SDGsも環境の問題ではなく人権の問題です。ひとりひとりが尊重される人間だという感覚を持てることが大事ですね。

長阪副会長：自分の文化を尊重することも大事で、社会に溶け込むスキルも大事だと思います。

中島委員：バックグラウンドは違っても一緒に社会を作っている人たちだという感覚がほしいですね。8年経てば外国人、日本人を問わず、年収180万以下で稼げない、結婚できない貧困層の人々が1千万人を超えると言われていています。日本社会はこのままだと暗いと思います。そんな中でひとりひとりが誇りを持って生きていけるか、自己肯定感を持てるのか、基本的な人間の権利を持ってない社会になってきている不安があります。

長阪副会長：ある講座で聞いたのですが、高校生の自己肯定感のアンケートで、何割の人が自分はダメな人間だと答えたと思いますか。日本は小学校で7割が肯定的ですが、高校生になると7割が自分はダメな人間だと思っ

ているようです。

中島委員：自分が社会で必要とされていないと思う人も多いかもしれません。コミュニケーションの中で「ありがとう」と言えるようなベーシックな感覚が必要です。そういう感覚をお互いが持つことが人間らしいし、自信を持って生きていけることにも通じるように感じます。

ゴー委員：だんだんそれが失われていく将来が心配です。

加藤委員：多文化共生は日本人だけの問題でなく幅広いし、社会の動向も見ながらでないと一概に言えませんね。

中島委員：政策として進められる多文化共生もありますが、考え方についてはそうもいきません。

ゴー委員：相談員である方の相談にあれこれずっと対応しています。信用されての相談はとても嬉しく、その方もだんだん成長して自分でもできるようになります。日本語も覚えようしないで通訳もしますが、もしその場にならなければ違う人が対応します。そうすると相談者がどういう方なのかという最初のところからのやり直しです。外国人も自分が努力しているところを見せないとならないと思います。

中島委員：努力したら評価されるというサイクルが必要かもしれませんね。

高畑会長：では発表に移りたいと思います。Aグループからお願いします。

#### Aグループまとめ（野田委員）

・多文化共生はなぜ必要かという問いに対して、やさしい日本語が一つの切り口になるのではないかと。その背景として、やさしい日本語は、優しい気持ちでお互い尊重することにつながる。

・変化の激しい日本においては柔軟性が求められ、情勢に対応するため、私たち自身も変化していかなくてはならない。そういった時に多文化共生が必要なキーワードになっていくのではないかと。

・人口減少で日本の国の在り様が変わっていく。その変化にどう対応していくかにおいて、多文化共生が日本の社会の望ましい形として必要ではないかと。

#### Bグループまとめ（加藤委員）

・多文化共生の必要性について、日本人と外国人住民の問題だけなのかという話が出た。日本人の中でもひとりひとり違うもので、相手をどう思うか、自分に誇りを持てるかという感覚が、多文化共生にも繋がっていく。

・みんなが同じ社会を作って行くという認識があるかどうかが大切という話になった。高齢化社会で働く外国人との間にギャップがあったり、コンビニで働く外国人は多いがお礼の一言もないなど、外国人の活躍に理解が得られない現状もある。ひとりひとりの意識の大切さと併せて社会の動向も考えなければならない。

高畑会長：各グループからの報告に対して補足などがありましたら、フリーで出してください。

ゴー委員：日本人は時間が無い、余裕が無い方が多いように感じます。私も子ども優先で自分自身のことは余裕が無くなりがちですが、例えば電車で高齢者が立っていても見て見ないふりをしている人たちがいます。若い人たちの中でも携帯ばかりで全然会話がありません。外国人が一生懸命日本語で接客していても、「ありがとう」の一言もありません。冷たい人たちの中では温かい気持ちになれません。「ありがとう」と言われたらがんばれる気持ちになります。家庭の中にももっと会話ができれば、人としての温かさを外にも向けられると思います。

高畑会長：言葉が通じるか通じないか以前の問題として、そもそも会話をしようとしているかということですね。

伊藤委員：あまり外国人であること意識しないほうがいいと思います。日本に来てせっかくのチャンスがあっても、自分自身をマイナスにとらえてしまわないかが心配です。なんでも前向きに生活していけることが重要だと思います。

磐村委員：やさしい日本語の普及をミッションとして取り組んでいますが、シンプルでやさしい表現、やさしい気持ちや姿勢、マインドが、多文化共生の礎を築く上で大切だと思います。今回、やさしい日本語がキーワードとして盛り込まれていることはとてもありがたく、もっと知ってもらえるよう私も努力したいと思います。

パメラ委員：キーワードはやさしいマインドです。日本は既に多文化共生社会です。言葉や国、人種の問題ばかりではなく、多文化共生は社会全体をもっと豊かで、もっと幸せにするものです。挨拶するとか、無視しないとか、相手の気持ちをまず考えるような社会になれば、静岡は素敵なまちになると思います。そのために多文化共生の意識を高めることが必要だと思います。

高畑会長：多文化共生社会というコンセプトは、社会全体が豊かになるひとつのステップであるという考え方

が、割と理解しやすいかなと感じます。外国出身の人ばかりの問題ではなく、日本でずっと暮らしている人たちも関わって、多文化共生を実現することで、静岡市に住んでいる人たちの豊かな社会を実現するという基本的な方向性が見えてきたと思います。皆さん今日は大変良い議論をしていただき、ありがとうございました。それでは進行を事務局にお返しします。

事務局（興津）：活発な議論をいただきありがとうございました。担当者として、条例ができたのですが、多文化共生は心のこと、意識のことでもあり、行政が計画立てて進めることの難しさを感じていました。今日のお話を聞いて、キーワードとして「やさしさ」を盛り込んでいきたいと思いました。ありがとうございました。

事務局（萩原）：皆さんありがとうございました。気付かなかった視点や、最後はまちというか、日本の国の在り様だというようなご意見をいただきまして、ありがとうございます。昨年度から今日までの意見をこれからもう一度まとめて見直して、次回の資料を作っていきたいと思います。次の協議会は11月の21・22・28日を候補日として、できるだけ多くの委員の皆さんに出席していただける日を選び、またご案内を申し上げます。それでは、最後に閉会にあたりまして、観光交流文化局次長の岡村よりご挨拶を申し上げます。

岡村観光交流文化局次長：本日はグループワークでの多数の貴重なご意見をいただきありがとうございました。また、傍聴をしていただいた方もありがとうございました。私が一番印象に残った点は、最初に副会長から「日本は多文化共生をもっと肩ひじを張らずに自然にできるようになるといい」と言っていた点です。「やさしさ」が多文化共生の意義だとも言っていました。市が多文化共生社会をどう実現させていくか、条例を無理やり作って、併せて計画まで作ろうとしていないか反省しています。日本では、ひとりひとりに多文化共生を思ってもらえたとしても、社会全体としては難しいという気もしました。今日最後のほうに皆さんに言っていたように、何とかひとりひとりの中では続いていくようになるといいなと感じました。本日はいただいたご意見を反映した骨子案を次回までにまとめてお示ししますので引き続き、お力添えをいただくことをお願いしまして、閉会の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

事務局（萩原）：以上で第二回多文化共生協議会を終了いたします。

以上

会議録署名人 高畑 幸